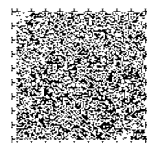


人権教育指導者向け学習資料



人権のいろ いっぱい いまKARA ここKARA わたしKARA

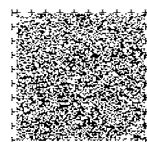
No.
23



テーマ 絵本を通じて 学ぶ「人権」

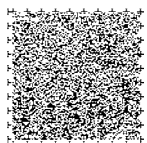
- 「絵本と人権教育」KARA 02
- 「絵本制作を通じて出会った『人権』」KARA 04
- 「絵本を通じた出会いの場」KARA 09
- 「絵本を活用した学び」KARA 12
- 「絵本の紹介」KARA 16

発行 令和7年12月 福岡県教育委員会
福岡県教育庁教育振興部人権・同和教育課
住所 福岡市博多区東公園7-7
TEL 092-643-3918
FAX 092-643-3919



利用の際には必ず下記サイトを確認ください。
www.bunka.go.jp/jiyuriyo

※全ページの上に音声コードとその位置が分かる
切り欠きを付けています。
※県庁ホームページからスクリーンリーダーソフト
による読上げも可能です。



小さな物語が、大きな気づきをくれる

絵本はこどもから大人まで誰もが親しみやすく、心に残りやすい表現手段です。物語や登場人物を通して、多様な価値観や立場にふれ、小さいころから自他の人権を尊重するために必要な「想像力」を育むことができます。マジョリティが気づきにくく、理解されづらい人権課題についても、絵本をきっかけに「自分ごと」として考え、世代を超えて共有できる学びの場をつくる可能性を秘めています。

福岡県内では、これまで様々な人権につながりがある絵本がつくられてきました。その内の1つである「いのちの花」の作者である園田久子さんに絵本制作に至った背景や人権教育推進のために大切なことについてお話をうかがいました。



そのだ ひさこ
園田 久子 さん

プロフィール

福岡県人権研究所副理事長。専門は人権・部落問題、女性史・女性問題。九州産業大学などの大学で講師として、部落差別（同和問題）をはじめとする人権課題の解決に向けた教育、啓発や人材育成を精力的におこなっている。

絵本『いのちの花』について



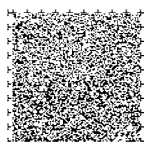
この『いのちの花』は、丸木俊^{まるきとし}さんが描いた原画大の絵本です。上質な和紙に描かれた原画は素晴らしく、各地で原画展が開かれたこともあります。福岡県内のある被差別部落に伝承されている江戸時代（1800年・寛政12年）の話をもとにしています。地域の中の子に残っている資料と、それにまつわる伝承をもとに私が創作したものです。当時、人気の芝居の上演中に、酒に酔ってあばれた武士^{ちようちやく}を打擲して逃げた5人の若者がいました。それは5人の町人だったろうと言われています。しかし、その罪をきせられ、被差別部落の若者5人が自分の生まれた「むら」を救うために名乗り出て、無実でありながら処刑されたという話です。

さいごの声は天に散った
たまのようないのちが五つきえた

「俺たち
人間の腹からうまれた……」

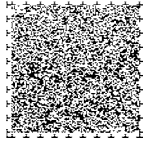


上の絵は、5人の若者が処刑された瞬間を表現した絵です。この場面の絵を依頼するにあたって園田さんは「殺された瞬間人間になった・解放された様子を描いてほしい」と、絵を描いていただいた丸木俊さんに依頼したそうです。「うまれた」の後には、もともとある言葉が書かれていました。みなさんは、どのような言葉を想像しますか？



なぜ絵本の制作に至ったのか

「差別はいけない」という^{いかた}鑄型を押すような教育では、差別をなくすどんな力にもならないことは、自分の非力さも含めて長年感じていました。たとえ困難でも、私は自由な自己表現ができるような実践をこそ創造したいと考えるようになりました。そのために詩人でもないのに、絵本の詩を書き始めました。自分が一度も受けたことがない差別について言葉にするのは大変困難でした。日常のはしばしで聞く語り(伝承)をまえに、何という私の表現の乏しさよと思いました。どうしても言葉がなく、たった数行に何年間も行きくれました。しかし、たくさんの人々の限らない支えをいただいて、絵本の出版にまで至りました。現在、県内外の学校に招いていただいた際には、生徒の自由な自己表現を大切にする「質問に答えない質問人権集会」にチャレンジしています。絵本に関する生徒からの質問を思考を促す問いに替えて、周囲の生徒たちに返すことを繰り返し、生徒たちを揺さぶるのです。その往復の中で、こどもたち自らが私の真意に至ります。その時、周りのこどもたちから拍手が沸き起こり、発言した子の顔が満面ほころびます。



福岡県人権教育・啓発基本指針(平成30年改定)には、人権が尊重される心豊かな社会を実現するためには、「一人ひとりが様々な人権問題を自分の問題として捉え、問題解決のため自ら判断し、行動できるようにすること」が重要だと明記しています。園田さんは、自他の人権を守るために大切なこととして、次のように整理しています。



差別を「無くす」とは ➡ 差別を「減らす」こと

誰にでもその力はある

そのために大切なのは…

1



「知る」「学ぶ」
(様々な知識や
情報を得る)

2



ものごとを見極める
判断力をつける

3



多様な人々と
つながる

4

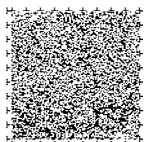
それでも解らない、人の痛みや悲しみを「想像する」

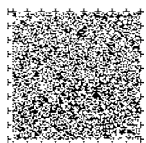
福岡県内には、人権問題をテーマにした絵本の先駆的な存在として『菜の花』という作品があります。その作者である松崎武敏^{まつざき たけとし}さんはこんなことを話されていました。「同和問題? 簡単だよ。相手の立場に立てればいいんだよ。」この言葉は、決して人権課題の解決を容易に考えているものではありません。人の痛みや悲しみは、簡単には解らないし、解ったふりをしてはいけないと思います。解るためには、「想像力」を駆使しなければいけません。

人の痛みや悲しみが解るようになる努力をすること。人には誰にでもその力があります。



「想像力」も含めて、上記の4つの視点で、本誌で紹介している絵本の内容や作者の思いにふれてみてください。





寄稿

「なぜ、絵本で人権問題なのか」



絵本作家 なか がわ ひろ のり 中川 洋典 さん

プロフィール

絵本作家、イラストレーター。京都府舞鶴市生まれ。大阪府在住。絵本に『ドカドカドン』(文研出版)、『ミカちゃんのひだりて』(ひかりのくに)、『きみの家にも牛がいる』(解放出版社)、『だから走るんだ』(あかね書房)など多数。読み物に『焼き肉を食べる前に。』(解放出版社)、『ぼくとキキとアトリエで』(文研出版)がある。

絵本にはたくさんのジャンルがありますが、すぐに思い浮かぶのは物語絵本ではないでしょうか。ページをめくるにつれて物語が進行し、最後に着地する形式のものです。物語絵本には大きく分けて古典絵本(昔話や民話などに絵をつけたもの)と創作絵本(作者が自由にストーリーを作り絵をつけたもの)があり、私が主として描いているのは創作絵本です。

そして物語絵本と対を成す形で、もう一つ大きなジャンルがあります。それを学習絵本、知識絵本と言います。最初から学びを目的として作られた絵本で、私の絵本作家としてのスタートは学習絵本でした。2001年に出版された『太鼓』という絵本です。



『太鼓』(2001年刊)



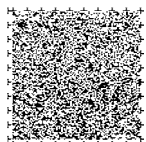
この絵本は太鼓の作り方や成り立ち、産業としての歴史などを盛り込んだ内容になっています。

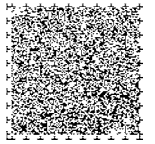
太鼓作りはかつては被差別部落の基幹産業であり、江戸時代の頃から今の大阪市内では盛んでした。というのは太鼓の皮が西日本から集まってくる場所が大阪市内の被差別部落にあり、その地で太鼓作りが盛んになったという歴史があります。

にもかかわらず、当時40歳手前だった私は部落差別についてほとんど知りませんでした。確かに小学校～高校で同和教育を受けていましたが、不正確な先入観だけが私の中に残っていました。それが私が受けた同和教育だったというのが正直なところですよ。

そういう人が被差別部落の基幹産業であった太鼓屋さんへ取材にいくわけですから、さすがに心配になって編集者の方に相談をしました。するとこう返ってきました。「これから一緒に勉強しましょう」と。

当時私は会社に勤めながら絵を描いていて、いつか自作絵本を描きたいと思っていました。そん





な私にとって、『太鼓』の仕事は絵本の世界へ入るための貴重なオファーでしたから、「わかりました」と即答しました。それはあくまで打算であり、自分が出したい創作絵本を出版するためには、そのくらいの廻り道も必要だろう程度に考えていました。

絵本を制作するにあたって部落問題について、当事者の方に実際に話をうかがいに行きました。その場で色々話を聞いたのですが、知らないことが多くてその度質問しました。知った振りならいくらでもできますが、実際に仕事の現場へ行って取材をするのです。そんな知った振りをしてもすぐにばれます。

一番危ないのは「知っているつもり」という思い込みだと、私は思っていました。どこへ行っても「知らないで教えてほしい」の立ち位置で、解放運動の経験者から部落差別の話を聞く、学校の先生に授業内容を教えてもらいました。その後に太鼓職人さんの仕事を見せてもらう機会がきました。

太鼓屋さんの現場へ取材でお邪魔しまして、職人さんが太鼓の胴の歌口を削る作業をしておられるのを間近で見せてもらいました。見ていてうわっ!と思ったのは、職人さんの手です。私が話をお聞きした職人さんは職歴50年のベテランでしたが、太鼓作りはものを掴んで引っばるという作業も多いので、指や手首の関節が発達していて凄く太い。憧れるような手でした。



作業後に対面で質問をさせてもらい、初歩的なことばかり聞いて、(今思い出すと恥ずかしい限りですが)どの質問にも丁寧に教えて下さいました。その中で「太鼓職人としての誇り」について聞くと、こうおっしゃいました。「それは自分の内に秘めておくもの。一言でも口に出して誰かに聞かれたら、その瞬間に失われてしまう」と。あまりのかっこよさに痺れました。

その職人さんのところに何度か通って、もの作りをする喜び、手応え、厳しさ、心構えなどの話を聞いたことは、今も自分の仕事をする上での我が身を照らすものさしになっています。

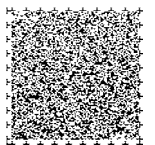
2 『かわと小物』『くつ』(2003年刊)

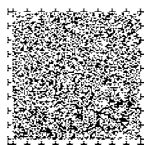


『太鼓』の後、同じ皮革シリーズで『かわと小物』『くつ』という絵本の絵を描きました。牛からはがした皮から毛やゼラチンを取ってそのまま置いておくと、カチカチに堅くなった乾皮になります。皮革製品として使用するためには、なめしという工程が必要になります。2002年当時姫路に白なめしという、塩と菜種油だけで皮から革に仕上げる世界でも珍しい技術を持った方がいらっしゃいました。『かわと小物』ではその白なめし職人さんのと



ころへ取材をさせてもらうことになり、行く前に学芸員さんに一から教えてもらいました。そして『太鼓』の時と同様に、職人さんの作業現場へお邪魔してみせてもらいました。足、手、へらで皮を揉む、体全体を使って伸ばして、またへらでこすりつけるように揉む。揉めば揉めほど皮は段々白くなってくる。大変な労力が必要で、体全体のバネで作業をされていま





した。やっぱり手が鍛えられていて、この道で何十年も作業を繰り返してきた人の生活を雄弁に物語る手でした。



翌2003年には『くつ』の取材で、大阪の靴職人さんのお店へお邪魔しました。昔ながらの革靴作りを今に伝えてきた方で、革底と甲靴の一足丸ごとを全部手縫いで一人で作られます。2日で一足ぐらいのペースだったと思います。



とにかく工程が多すぎて、何回見ても憶えられない。しかも使用する道具も多く、作業が細い。手先の微妙な技術が靴作りの命だとわかりました。

この職人さんの手の爪は指の中にめり込んでいました。もの凄い負荷が爪や指先にかかっている。この一連の動作を50年以上されてきて、もうこれ以外ないという手をされていました。

3

『きみの家にも牛がいる』(2005年刊)

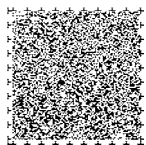


皮革絵本シリーズ3冊を作り終えた2003年の暮れに、編集者が次の企画を口にしました。皮は動物の肉体の表面を覆っている。それを剥がして、太鼓や靴や他の革製品に人間が工夫して使えるようにしている。皮以外はほとんどが肉。基本的に食用であれば食べる。誰が?ほとんど人間が食べている。それは現代社会の食生活では当たり前のことだ。その当たり前の食生活は、どういう仕事を経て我々の前に提供されているのか?誰が牛や豚を、皮と肉に仕分けているのか?それは実際にどんな内容の仕事なのか?その仕事を絵本にしよう、と。

この企画を聞いた時は「嘘でしょう?」と思いました。それぐらいハードルの高いアイデアでしたから。そして約1年半の時間をかけて2005年10月に『きみの家にも牛がいる』が出版されました。当時の児童書の分野で、初めて屠場のことを詳しく描いた絵本でした。

屠場とは牛や豚などの家畜を絶命させて解体し、食肉に加工する施設のことです。屠場の「屠」という言葉は、ほふると訓読みします。辞書で調べると、「ほふる」とは、皆殺しにするという意味がある。人が働く場所を、皆殺しをする場所と表現している。そういう言葉で表現されている場所で行われている仕事がある。私たちはその仕事を知らず知らずのうちに、見てはいけないものにしていないか。動物を解体して肉にしてくれる職人さんがいなかったら、私らは肉を食べられないのに。

今回は大阪の南港食肉市場へ取材をさせてもらいに行きました。前日に牧場から運ばれてきた牛は、専用通路を通過して工場の中へ入り、行き止まりのところで筒のような銃で眉間を撃たれて気絶します。銃と言っても玉が出るわけではなく、火薬の破裂で筒のセンターから細い金属の芯棒が飛び出て、牛の眉間に小さな穴を開け、そのショックで牛は失神します。牛が倒れた瞬間、私は



肉ははじめから「ある」
ものじゃない。
いろいろな人の手をかりて
「つくられる」ものなんだ。



ショックというよりも躁状態になったのを覚えています。体の中で血が沸き立つ感じがしました。「今、これまでの人生で、見たことのなかった場面を目の当たりにしている」そう言い聞かせている自分がいました。

その後頸動脈を切って放血し、後ろ足をウィンチで釣り上げて頭と前足を切り落とし、皮を剥き始めます。その後内臓を取り外し、背骨を電気ノコギリで切って枝肉が出来上がります。今もそうだと思いますが、基本的に作業場での見学や取材で、撮影や録画やスケッチは許されません。作業の手順や危険性、衛生面を考えると、場内を取材で動き回することは作業の妨げになります。ノンフィクションであるにも関わらず、取材の規制があることで、絵を描く作業は簡単ではなかったことをよく覚えています。私以上に、文章を担当した小森香折さんは大変だったと思います。それまでになかった絵本ですから。そういったことを考えると、「お肉はひとの手によって作られるものなんだ」という

主題・メッセージを紡ぎ出した小森香折さんの功績はもっと評価されるべきだと私は思います。

この取材で生きた牛が絶命し、お肉に変えられてゆく工程を初めて目にしました。それは牧場で草を喰む肉牛と、精肉店やスーパーで売られているパック詰めのお肉とが、一本の線で繋がった瞬間でした。ここで意識が変わりました。

4

『焼き肉を食べる前に。』(2016年刊)



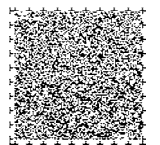
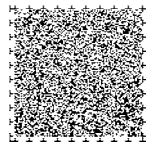
『きみの家にも牛がいる』が出版になった後、かなり反響がありました。小・中学校の先生方や、食肉関係の方はもちろん、児童書業界からも大きな反応があり、この絵本の出版後にたくさんの屠畜絵本が出ました。しかし書き手の思い込みに偏った職業紹介、情緒に流された仕事内容の絵本が多く、そのことを屠場で働く人たちはどう思ったでしょうか。

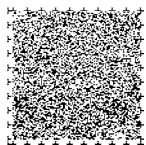
私自身は『きみの家にも牛がいる』だけではまだまだ語れていないことがあって、その仕事をやり残した気がしていました。それは実際に牛や豚を絶命させ、食肉へと加工する職人さんたちの本音にこそ、耳を傾けるべきではないかということでした。現場で働く人の職業観や現実、日々のメンタリティにまで踏み込んだ本があったら、という思いで作ったのが『焼き肉を食べる前に。』で、2016年に出版されました。内容は食肉業の中で屠場労働をする人へのインタビューで、ヤングアダルト向けの範疇に入る本ですが、私としては大人にこそ読んでもらいたい一冊です。

先ほど食肉市場の取材では、撮影や録画やスケッチが許可されなかったと書きました。作業の危険性や衛生面を考えての判断ですが、それだけではないと思います。

食肉市場では外部からの見学を受けている所もあります。その際にはきちんと事前に見学意図を聞いてから見学を行っているのですが、それにもかかわらず、作業者のいる前で侮蔑的な言葉を口にした見学者がかつていたと聞きました。自分の職場で自分の職業を差別されたら、それは誰でも怒ります。

自分たちの仕事を理解してもらうために行なった見学会が、差別の場になったことがあった。屠





場で働く人が外部に対して自分たちの仕事を積極的に公開してこなかったのは、そういう出来事があったからです。おそらく今も取材や見学に関して撮影・録画・スケッチは許可されないと思います。それは屠畜労働に対する偏見や差別が変わっていないということの表れではないでしょうか。

あとがきにも書いていますが、『焼き肉を食べる前に。』で私が伝えたかったのは、食肉の現場で働く人の生の声であって、筆者である私の思い込みではないです。主役はナイフを握って動物と向き合っている人たちです。明日のお肉を作ってくれている食肉の職人さんたちです。彼らがどういう思いで動物と相對しているのかを知ってほしいのです。私たちの食卓に上がるお肉は最初からあるものではなく、屠畜という加工を経て、人の手によって作られるものです。それも生きた動物をできるだけ苦しめないように絶命させることで、人は安全安心な食べ物を手に入れています。最初から死んでいる牛や豚や鶏を扱っているわけではありません。それは肉だけではなく、魚も野菜もお米やパンも全て同じです。生きている魚、野菜、稲、麦を絶命させて、食べ物に変えているわけです。私たちは何の病気でいつ死んだのかわからない魚を拾ってきて食べているわけではないですから。元気に生きている生き物の命を奪って食べ物に変える。それを食べることでしか、私たちは生きてゆくことができないのです。「そんな残酷なことをしてまで食べたくない」という人が口にできるのは、水ぐらいじゃないでしょうか。

屠畜は私たちが生きていく上で、なくてはならない仕事です。その仕事をする人に感謝をし、命を食べ物に変えてくれた生き物にも感謝をする。それは当たり前のことではないでしょうか。

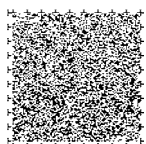


5 さいごに

『焼き肉を食べる前に。』が出版されてからちょうど1年後の2017年の春頃から、この本について話す講演の依頼が増えました。「あまりにも日常的すぎて深く考えたことがなかった」「言われてみたらその通りだと思う」「食肉業を差別する人が肉を喜んで食べている。無知が差別を生んでいる」といった率直な感想をもらい、読者に何かが届いた実感がありました。

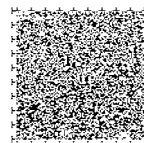
小学校の授業でも、初めて屠畜の取材に行った折のことを話すのですが、「お肉は最初からあるものだと思っていた」「食べ物になってくれる動物や植物に感謝!」「牛をお肉にしてくれる人がいるから牛丼が食べられる」などなど、小学生の新鮮な気づきを教えてもらっています。スライドなどを使ったまとめを共有する授業ではなく、私が感じたままを伝えたくて、絵本を読み、身振り手振りで表現して話しています。こどもたちが頭の中でいろいろ想像し、絵本の世界を更に膨らませてくれていると感じ取るからです。

私にとっては遅い勉強始めだった同和教育ですが、打算で始まった『太鼓』から『かわと小物』『くつ』を経て、『きみの家にも牛がいる』で意識が変わり、『焼き肉を食べる前に。』は自分で主導する企画本となりました。絵本を描く仕事でいろいろな人に出会い教えてもらって、一冊を終えるごとに同和教育の階段を一段ずつ登ることができた気がします。





ご自身の車いすでの生活を伝え、多くの人たちにポジティブになってほしいという思いから、クラウドファンディングを活用して絵本を出版した渋谷 真子さんにお話をうかがいました。各地での講演活動や絵本の寄贈を続ける背景にはどのような思いがあるのでしょうか。



やまがた特命観光・つや姫大使／鶴岡ふるさと観光大使／Wheelchair YouTuber

しぶや まこ
渋谷 真子 さん

プロフィール

山形県の山奥にて茅葺き職人をめざしながら、猟師としても活動していた2018年7月工作中に茅葺き屋根から落下し、脊髄損傷による障がいを負い、車いすの生活に。自身の日常を包み隠さずYouTubeで発信するなど多岐に渡り活動している。著書に『普通で最高でハッピーなわたし 特別でもなんでもなし二度目の人生』(扶桑社)などがある。

わたしは 田舎の小さな村に生まれました。

子どものころは、虫とりをしたり近くの山に登ったり、走り回ったり。

運動も大好きで いろんなスポーツにもチャレンジしていました。

大人になれば旅行に行ったり、友だちと遊んだり。

明るく元気でどこにでもいる女の子。

でも、

その日常はある日突然、変わってしまったのです。



【絵本『1日1日をハッピーに』より】

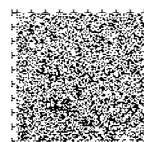
胸張っていい。私たちは強いんだ。

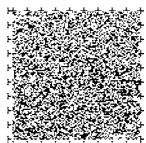
五体満足の時、全ての感覚が研ぎ澄まされて、トイレに困ることはなかったし、デコボコ道でも足を使って楽に移動ができてたから、生きることに関しての苦はあまりなかったと思うんです。麻痺をして、排泄も含めて、わからないことやできないことが増えました。「車いすの人は劣っている」って感覚になりがちなんですけど、できないことをカバーしながら、みんなと同じペースで生きているってすごいことなはずなんです。できない体をいかに使って、同じように生きていて、同じように楽しんでいることが最強なことなんだってことを知ってほしいと思います。体の状態や心の状態にもよるけれど、できるように、リハビリ、トレーニングしている人もたくさんいます。

車いすになってからは、地元のお祭りや興味のなかったイベントに出向くようになりました。「車いすの人がここにいますよ。よろしくお願いします。」みたいな感じで行きます。普段身の回りにいないような車いすの人が街中にいると、「何だろう?」「あ、車いすの人だ」って見慣れないから見ると思うんです。車いすを見慣れて、存在を知っていくと、車いすの生活が日常の風景になってくるのかなって私は思ってます。

絵本をキッカケに

車いすや障がいに対する距離が
縮まってくれたら嬉しいです。





“人生一度きり” だけど、私は“二つの人生” だし、 一度の人生で健常者と障がい者の二つの生き方ができる。

車いす生活にならなかったら、ルーティン化された暮らしの中では、障がいがある人の視点になる機会はなかったと思います。大変な面もありますけど、「障がい者の世界」という世界を知れました。例えばパラスポーツに関して、パラスポーツの中にも色々なスポーツがあって、実際に体験してみるとめっちゃめっちゃ楽しいんです。ゲームとしての楽しさに気づけたのは、車いすになったおかげだなんていうのがありました。また、YouTubeを発信して、いろんな方々と出会えて、いろんなことができて、「健常者」だったら絶対にありえなかったことなんです。車いすユーザーになれたから開けた世界、なれたから芽生えた感情があると思います。車いすという人生が新しい自分を見出してくれて、二度美味しいと感じました。今の方がアクティブでいろんな体験をしてるので、今の方が充実してるんですよ。

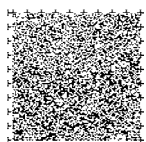


小さな子たちに届けたい

この絵本を作成したのは、小さな子どもたちに届けたいという思いがあったからです。私自身が26歳で車いすになった時に、「26年間車いすの人と接したことがあったかな？」って、身近にいるのかいないのかさえ想像がつかなかったんです。

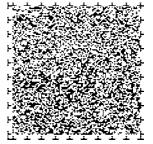
友だちの子どもと遊んでいて、私が車いすになったことが分かったと、初めは、「もう歩けないの？」みたいな感じで戸惑いがありました。しかし、何回か会うと慣れてきて、大人だったら遠慮しそうな「車いすを押したい」「車いすに乗ってみたい」と言って、あっという間に壁が壊れました。

絵本を通して、小さい頃から車いすの人と出会う環境があったら、大人になった時に「どうしていいかわからない」という状態をなくしたり、車いすになることが不幸っていうイメージを「そうじゃない」「色んなことができるんだよ」って伝えたりして、誰もがもっとポジティブになれるきっかけになると思います。また、車いすの人、怪我をした人、落ち込む人は日本人だけじゃないし、日本にいる人も日本人だけじゃないから、色んな形でこの絵本を届けられたらいいなと思い、英語の翻訳をつけています。



絵本を制作・配布して感じている絵本による啓発の意義と効果

こどもたちに一番届けやすい形は何かって考えた時に、私から直接渡していくことが大事だと思いました。車いすのことは、自分から知ろうとしないと、知ることができない。私自身は「健常者」の時に、車いすや障がいのことを知りたいと思う環境に出会わなかったんです。障がいがあったとしても、いろんなことができるんだよっていうことを、「当事者」にも「当事者以外」にも知ってほしい。今までふれあったことがない車いすの人たちに対してのイメージを絵本で身近に感じてもらって、車いすの人も普通に過ごしてるんだって、一緒にいるんだってことを身近に感じてもらいたいです。直接出会った時に何もできないかもしれないし、声をかけるわけではないかもしれないけれど、車いすがある世界を知ると、環境づくりをする時に「車いすの人に聞いてみよう」とか、何かがあった時に「車いすの人いたよね」と、思っ て行動できるのではないかと思います。絵本は障がいについて知ってもらうきっかけの一つであり、「当事者」にとっても「健常者」の人にとっても、普段の生活の中でのポジティブが生まれる一つの種としてあってくれたらいいなって思います。



絵本をどのように活用するか

まずは、たくさんのこどもたちに読んでもらいたいです。図書館に置いてもらって、こどもだけじゃなくても、老若男女、みなさんに読んでいただきたいです。文字がわからない年齢のお子さんには、絵で楽しんでいただいて、文字が分かるようになってきたら少しずつ読み聞かせしてもらいたいです。英語版もあるので、英語の授業で、リアルな英会話の教材としても使えると思います。就学前の子たちに、毎晩読み聞かせの絵本を選ばせて、「どれがいい？」って聞くと三日間連続でこの絵本ですって子がいたんです。保育園の頃に読んで、ずっと大好きで、小学校に通い始めたら小学校の図書室にもあったから、毎週借りてきていたそうです。内容を理解してくれてお手紙をくれる子もいました。こどもきっかけで絵本に出会った親でもいいし、親きっかけのこどもでもいいんですけど、連鎖してくれるきっかけの絵本であつたらいいんです。絵本にしては文字がめちゃくちゃ多いんですけど、それでも読んでくれるとすごい嬉しいなって思ってます。

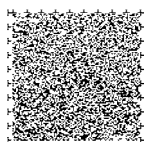
す　　ひと　　あ
好きな人たちに会って
す　　しごと
好きな仕事をして
いろいろな世界を旅して。
えが　お　　おも　　で　　きざ
笑顔とともに思い出を刻んでいきたい。
うご　　あし
動かないのは脚だけなの。

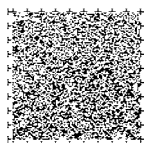
Meet the people you love. Do the work you love.
Travel around the world.
I want to carve memories with smiles.
The only thing that doesn't move is my legs.

1日1日をハッピーに

まだまだ私の車輪が

止まることはありません。





県内でも絵本を活用した教育実践は様々おこなわれています。ある学校では『つるつるのおとうと』という絵本との出会いから、教材として活用した授業実践がおこなわれました。

実践内容を紹介するにあたり、絵本の作者である森 孝文さんにお話をうかがいました。



熊本県立第一高等学校 / 教諭

もり たか ふみ
森 孝文 さん



プロフィール

熊本県人吉市で生まれ、現在は熊本市内在住。熊本県内の高校で教諭として勤めている。2人のお子さんの父でもある。2人目のお子さんが2歳になる前に自己免疫疾患の汎発性円形脱毛症を発症し、全身脱毛となる。治療を進める中で、見た目でのからかいや中傷があることを実感し、絵本『つるつるのおとうと』を制作。絵本を通して病気のことや外見による偏見をなくしていく活動を2023年より始め、各地で講演や出前授業等を行っている。

お子さんの自己免疫疾患について

私の息子は汎発性円形脱毛症と診断を受けています。その原因と考えられるのが、自己免疫疾患です。これは免疫系機能が誤作動を起こし体の一部を攻撃してしまう疾患です。本来はウイルスや細菌といった異物に対して働くものが、毛包にダメージを与え、その結果として脱毛が生じてしまいます。2年に一度血液検査を行い、抗核抗体の値を見ています。この値が基準以上になると、全身への炎症の可能性が考えられ、いつも検査の時は緊張しています。また、免疫の攻撃対象が毛根以外にも移る可能性もあり、体調の変化を注視しています。治療も4歳まで続けましたが、本人が嫌がるため、中断しました。現在は病気も含めて我が子として受け入れています。

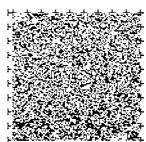


社会の中にある偏見や差別を実感したこと

髪が無いことで、想像以上にジロジロ見られることがありました。面白半分で追いかけてきたり、複数で笑い合っているのを見ることもあります。息子を馬鹿にするような心無い言葉を耳にすることもあります。様々なメディアで、髪が無いことで笑いをとったり、笑ったりすることで、笑いの対象にするようなことがあります。その影響もあるのではないかと思います、「髪が無い＝面白い・笑える」というような偏見が刷り込まれているような気がします。

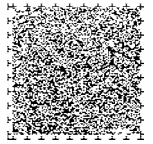
偏見や差別にさらされることへの不安から

いつどこから攻撃される（偏見や差別にさらされる）かわからないという気持ちで、日々息子の横を歩いています。これはいまだにそうです。特に私が周囲に対して攻撃的になっていた頃は、攻撃された時に素早く対応するために、相手を黙らせることを優先していました。それが、もっとも息子を守るのに有効だと考えていたのです。しかし、それではその場しのぎで、何の解決にもならないことに気づくことができたのは、私が教育の現場にいたからであったと思います。



なぜ絵本の制作に至ったのか

きっかけは現在、息子たちが通っている学校の校長先生のお話でした。「小学校は1年生と6年生では、理解する力に差があります。そのため、同じ内容の講義や講演を全校児童で聞くことはなかなかできません。特に低学年には視覚的な教材が必要です。」ということでした。そこで、低学年でも使える教材として絵本を考えました。また、高校の図書室にも絵本はおいてあり、生徒が手に取っているのを見たことがありました。きっと絵本であれば、幅広い年齢層で読んでもらい、考えてもらえると思い絵本の制作を考えるようになりました。



絵本『つるつるのおとうと』からいくつかの場面をご紹介します。森さんのお話も踏まえて読んでみてください。皆さんは、この内容からどのようなことを感じ、考えますか？

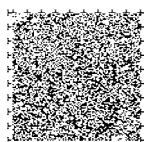
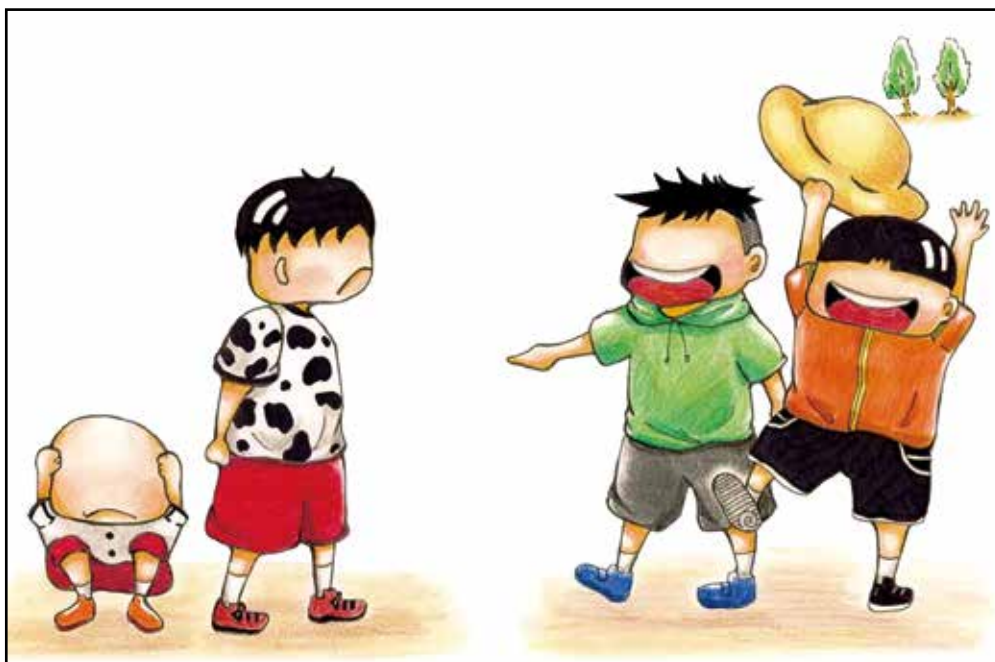


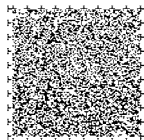
あるひ、おとうとが
こうえんに ぼうしを かぶっていった。
「あついからだよ～」っていったけど、
にいには きになってた。
それまで ぼうしをかぶって いなかったのに。
おとうとは つぎのひも そのつぎのひも
ぼうしを かぶっていった。



あるひ、にいには
こうえんで けんかして かえってきた。

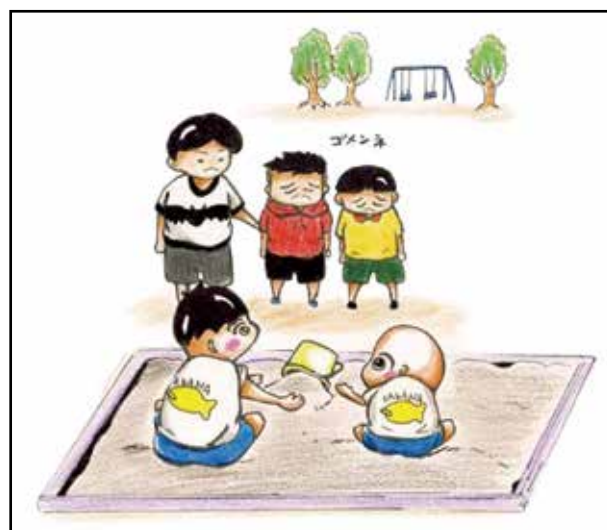
ママが、なんで けんかしたの？
って きいても、にいには だんまり。
だから、おとうとは ママに にいにが
なんで けんかしたのか はなした。





「こうえんで かみがなくて わらわれて、
とっても かなしかったんだ。そしたら にいにが
おこって わらったこたちと けんかに なったんだ。
だから にいには わるくない。
にいを おこらないで、ぼくが わるいんだ」

「わかってるよ。でも あなたも
なんにも わるくないだよ。
かみがなのは びょうきのせいで
からだを まもるちからが つよすぎる からだよ。
うつるびょうきじゃないし、あなたが つるつるなのは
わるくも おかしくも ないんだよ」

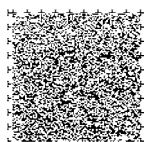


絵本の内容の後日談

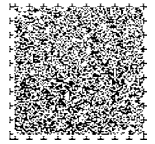
実は、絵本で登場した私の子どもを馬鹿にした子たちは、別の子に連れられて、後日謝りに来てくれました。声をかけられた時には本当にあつけにとられました。お礼を言うと、「病気かもしれないのに馬鹿にするとか、ダメだと思ったのでしっかり言っておきました。」と言うのです。それを聞いて、この年で知らない相手のことまで考えることができるなんてすごいと感じ、この子がこれまでどんな環境で育ってきたのかを考えました。その時、やはり何らかの教育の結果であることは間違いのないと思いました。それが家庭での学びなのか、学校での学びなのかはわかりません。しかし、教育の力によって、こんな子が増えてくれたらと本当に心から思ったのを覚えています。

絵本を読んでくださる方へのメッセージ

絵本を読んでいただけたら、お子様や周りの方とお話をしてほしいです。全身脱毛というだけではなく、様々な偏見や差別があることについて、この絵本を通して考えていけるといいなと思っています。私がめざそうとしている社会は理想なのかもしれません。しかし、一教師として、父親として理想と夢を最後まで追いかけていこうと思っています。個人の活動なのでゆっくりではありますが、確実に絵本の寄贈や教材としての活用を広げていきます。



県内の小学校における、絵本『つるつるのおとうと』を活用した授業実践の例を、本誌に掲載するにあたり、森さんのお話をもとにアレンジさせていただきました。本誌で紹介している絵本の場面（本誌P13,14）をもとに、自分の所属であればどのような授業や研修会をおこなうことができるのか、ぜひ考えてみてください。

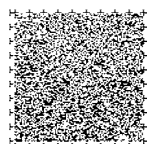


ここでは、学校における学習指導案の様式で紹介していますが、社会教育での活用も想定して、教科などを限定せずに掲載しています。

	学習活動	指導上の留意点
出会う	<p>1 本時のめあてをつかむ。</p> <p>○絵本の表紙の挿絵を見て、どのようなタイトルなのか予想して全体交流をおこなう。</p>	<p>○表紙に書かれているタイトルを隠した状態で挿絵を提示することで、子どもたちがもつ外見に対する偏見が表出してもここでは指摘をしない。</p> <p>※授業を通して振り返る</p>
	めあて 絵本『つるつるのおとうと』を読んで、外見だけで判断することについて考えよう。	
考える	<p>2 絵本『つるつるのおとうと』の前半（おとうとが帽子を取られる場面まで）までの範読を聞いて話し合う。</p> <p>(1) 汎発性円形脱毛症がどのようなものなのかを知る。</p> <p>(2) おとうとの帽子を取って、指をさして笑っている子どもが、どのような言葉を発しているのかを予想しグループで話し合う。</p> <p>(3) グループで交流したことをもとに全体交流をおこない、自分たちが絵本のタイトルを予想した時に言っていた言葉と比較する。</p>	<p>○汎発性円形脱毛症について、正しい知識をもとに理解することができるよう説明する。</p> <p>○おとうとを笑いながら指をさして笑っている子どもが発している言葉を予想することで、導入で子どもたちがタイトルを予想して言っていた言葉を想起できるようにする。</p> <p>○全体交流で出た言葉と導入での発言を比較することで、自分たちがもつ外見に対する偏見に気づくことができるようにする。</p>
深める	<p>3 絵本『つるつるのおとうと』の後半の範読を聞いて話し合う。</p> <p>(1) お母さんがおとうとを抱いて話しかける場面をもとにグループで話し合う。</p> <p>(2) グループで交流したことをもとに全体交流をおこなう。</p>	<p>○お母さんがおとうとにかけた言葉に着目させることで、人を外見だけで判断することのおかしさについて考えることができるようにする。</p>
	まとめ だれもが外見に対する偏見をもってしまうことがあることを自覚し、正しい知識をもとに相手のことを「知る」ことが大切。	
振り返る	<p>4 本時の学習を通して考えたことをもとに、これまでの自分自身や周囲の言動について振り返る。</p>	<p>○学習したことをもとにこれまでの生活を振り返ることで、学習した内容と自分自身の生活をつなぐことができるようにする。</p> <p>○絵本『つるつるのおとうと』の作者が絵本を制作するに至った背景を伝えることで、これからの実践行動への意欲を高めることができるようにする。</p>



ポイントは、実施する側が提示する人権課題を、いかにして学習者が「自分ごと」として引き寄せることができるかです。そのための方法は、学習者の実態に応じて変わってきます。



本誌で掲載した絵本の紹介

本誌で掲載させていただいた絵本の一部を紹介します。作者の皆さんの思いや絵本制作の背景を踏まえて、ご一読してみてはいかがでしょうか。紹介文として、県内の小、中学校に通う子どもたちの感想文を掲載させていただいています。



いのちの花

文 そのだ ひさこ
絵 丸木 俊 題字 丸木 位里



さむらいをふくろだたきにせず、その場できちんと話しあっていたら、罪のない人々が死ぬこともなかったのにと、思った。うまく言葉にできないけど、とても悲しい話だった。
(11歳)

身分や権力によって、罪のない人が死ななければならぬのはおかしい。「いのち」の大切さはみんな同じなのに、悲しい気持ちになった。自分の「いのち」を大事にしたいし、一人ひとりの「いのち」が当たり前に大切にされる社会にしたい。
(13歳)

きみの家にも牛がいる

文 小森 香折
絵 中川 洋典



牛さんは大切な存在だと思った。牛さんがいなかったら、くつろげるソファもないし、おいしいお肉や牛にゅうもない。探してみたら、家の中にたくさん牛さんがいた。牛さんすごい。
(8歳)

食べるときに苦手な部分があるけど、私たちのために牛は死んでくれている。牛をさばいたり、売ったりしている人たちのおかげで食べられていることや身の回りのものに形を変えて生きていることに感謝したい。
(11歳)

1日1日をハッピーに

作 渋谷 真子
絵 いずみ げんたろう



この本を読むまでは、車いすの人は「かわいそう」と思っていました。それは、私が車いすに乗っている人の事を知らなかったから。渋谷さんはイメージしていたよりも前向きで、足が動かなくなっても新しいことに挑戦していました。自分にも事故は起こるかもしれないし、自分だったら事故にあってもおしゃべりをしたい。どんな人だって幸せになれるんだと見方が変わりました。
(14歳)

つつるのおとうと

さく しりと리카ぞく
え T.taru



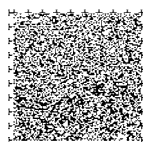
初めて表紙を見たときは、おもしろいお話かなと思いました。弟を守るお兄ちゃんがやさしくて、ぼくのお兄ちゃんみたいだなと思いました。
(8歳)

病気の関係でかみの毛が無くなることは聞いたことがありました。かみが無いことを理由にバカにするのはおかしいし、もしも自分の弟がバカにされていたら自分もゆるせないと思いました。
(12歳)

本誌で紹介した絵本は、福岡県人権啓発情報センター（クローバープラザ内7F）の啓発資料室で借りることができます。



「KARA FULL」は福岡県教育委員会のホームページにも掲載しています。



教員としての教育活動の中で、私自身が絵本のもつ力を感じた経験から、今回のテーマを設定しました。

人権教育・啓発を推進する上で、推進する側が伝えたい人権課題に対する見方や考え方を直接的に届けることは大切なことです。しかし、それだけでは伝わらないことも多いように感じます。

絵本では、文字で直接的には伝えないことがあります。そのため、イラストやストーリーを通して、読者が自らの経験に引き寄せて想像する「余白」を残しています。本誌の作成を通して、人権教育・啓発を推進していく上でも、この「余白」が時には必要なのではないかと感じました。

今回の本誌作成は、絵本の作者のみなさんにご協力・ご尽力いただきました。この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。誠にありがとうございました。
(希)

編集後記